各地区防犯セ

埼玉県読売防犯協力会

薬物使用の怖さ、危険をテーマにした防犯セミナーが6月18日、埼玉県志木市立志木中学校で開かれました。会場には、同中学校の生徒、教職員、保護者ら約220人が参加しました。

日本薬物対策協会・全国読売防犯協力会講師の佐藤智彦さんが講演を担当し、「ドラッグ(薬物)を常用すると、現実と非現実の区別がつかなくなる」と、その副作用を指摘しました。また、「薬物がいったん血管の中に入ると外へと排出されることはなく、常用しているうちに蓄積されてしまう。そのうち、『フラッシュバック』という幻覚症状を引き起こしてしまい、自らを傷つけてしまったり、他人に危害を加えてしまうことだってある」と、悲しい現実を報告しました。

講演の最後に佐藤講師は、一度薬物に汚染されてしまうと身体がそれを欲してしまい、薬物を断つことがたいへん難しくなることから、先輩や友達から「薬物をやらないか」と誘われたとしても、「きっぱり断る」ことを強く訴えていました。

山梨県読売防犯協力会

山梨県北杜市立明野小学校で7月12日、「セーフティー教室」が開かれました。同セミナーには児童、教職員ら約200人が参加し、全国読売防犯協力会講師・飯室眞奈美さんが担当しました。低学年には〈連れ去り防止〉、高学年には〈インターネットの使い方〉を中心に、犯罪に巻き込まれないことを大きなテーマとして、45分ずつ2回に分けて講演を行いました。

低学年に対するセミナーでは、平均的な大人の腕の長さに作られた模型を使って安全な距離感を指し示すと同時に、クルマに乗るように誘われても知らない人のクルマには乗らないように指導するなど、熱心に児童代表の3人に繰り返し実演を行いました。

また、高学年では、IDやパスワードなど、インターネットに対する個人情報の重要性を訴え、その取り扱いを間違えることにより、インターネット犯罪に巻き込まれる危険性について注意を促しました。

新潟県読売防犯協力会

高齢者に対する「特殊詐欺」の被害を防ぐことを目的に、9月11日、新潟県柏崎市のメトロポリタン松島で防犯セミナーが開かれました。同セミナーには県内の老人クラブ会員の200人が参加し、全国読売防犯協力会講師の飯室眞奈美さんが腹話術人形を使って加害者と被害者を演じ分け、特殊詐欺の事例をユーモアたっぷりに紹介しました。

講演の最後に飯室さんは、かかってきた電話の相手が「電話番号が変わった」「会社の金を使い込んでしまった」「会社の小切手を落としてしまった」「急いで返答してほしい」「すぐに穴埋めしなければクビになる」「レターパックで現金を送ってほしい」などと言われたら、「詐欺かもしれない」と疑ってほしいといい、「少し落ち着いて考えてみましょう」と、呼びかけていました。

※全国読売防犯協力会では、小学校や中学校、高校の児童、生徒、教職員、保護者を対象にした多くの防犯セミナーを実施しており、経験豊富な講師が皆様のご要望にお応えした内容の講演を実施してまいりました。また、高齢者を対象とした防犯セミナーの講演実績も多数あります。

皆様のお住まいの近くにあるYC(読売新聞販売店)が、こうした防犯活動を積極的に展開するとともに、防犯セミナーの後援にも協力しています。ご不明な点がございましたら、お近くのYCにお問い合わせいただくか、全国読売防犯協力会事務局(03-3216-9024《月～金の平日午前10時～午後5時まで》)にお問い合わせください。